

「関西道路研究会道路橋調査研究委員会 新設小委員会 調査研究内容」

設立趣旨書

橋梁の余寿命の推定および評価手法に関する調査研究小委員会

委員長	大阪市立大学	山口 隆司	教授
推薦学識員	大阪市立大学	角掛 久雄	准教授
推薦学識員	近畿大学	麓 隆行	准教授

全国的に橋梁の高齢化が進む中、架替には多大な費用を要することのみならず、通行止め等が社会および経済活動に与える影響は大きく、出来るだけ橋梁の長寿命化を図っていくことが求められている。

長寿命化を確実なものとするには、実施する補修・補強対策による寿命更新効果と余寿命とを適切に比較・評価出来ることが必要である。そのことが、さらには架け替えよりもそれが有利であるかどうかを判断することに繋がる。

本小委員会では、余寿命の推定に関する現状技術を調査し、比較・評価を行うとともに様々な補修技術に対する寿命更新効果について調査を行う。

なお、本小委員会では、産官学間の垣根を取り払った委員相互での率直な意見交換をもとに、上記課題の解決に資する有効な資料としてとりまとめるものである。

特殊鋼道路橋の維持管理に関する調査研究小委員会

委員長	近畿大学	東山 浩士	教授
推薦学識員	大阪工業大学	大山 理	教授
推薦学識員	関西大学	石川 敏之	准教授

平成 26 年度(2014 年度)から始まった 5 年に 1 度の近接目視による橋梁の定期点検は、平成 31 年度(2019 年度)からは 2 巡目に入ることとなる。これに合わせて道路橋定期点検要領(国土交通省道路局)の見直しがなされており、近接目視点検を補完・代替する非破壊検査技術を積極的に活用する方針が盛り込まれている。一方、約 17 万橋(橋長 15m 以上)のうち、トラス橋は約 1,800 橋、アーチ橋は約 2,600 橋であり、市町村が 43%を管理している状況にある。これらの橋梁では、引張材や格点部の劣化損傷により部材の破断が生じると、橋梁全体が落橋する致命的な状態に至る可能性や橋梁の挙動に大きな影響を与えることから、特殊鋼道路橋について、以下に示す維持管理に関する調査研究を進めるものである。

- ・維持管理における課題の抽出と損傷事例の整理
- ・定期点検における留意点、課題の整理および新技術に関する情報収集
- ・補修・補強工事における技術的留意事項や応急措置の方法などの整理

なお、本小委員会では、産官学間の垣根を取り払った委員相互での率直な議論の成果として、上記に掲げた内容を技術資料として取りまとめることにより、特殊鋼道路橋の維持管理における一助となることを期待するものである。

近年の大地震の被災事例にもとづく橋梁耐震性評価に関する調査研究小委員会

委員長 京都大学 高橋 良和 教授
推薦学識委員 京都大学 古川 愛子 准教授
推薦学識委員 大阪大学 廣畑 幹人 准教授

1995年兵庫県南部地震以降、橋梁の耐震対策が実施されているが、近年では、2011年東日本大震災、2016年熊本地震といった大きな地震が発生し、兵庫県南部地震以降の設計・技術で耐震対策された橋梁に被害が発生している事例が確認されている。また2018年大阪府北部の地震では、橋梁に大きな被害は発生しなかったものの、やや強い地震後の供用開始の判断など、新たな課題が浮き彫りとなった。

そこで、本小委員会では、これまでの地震による被災事例を収集・分析し、設計基準ならびに、耐震対策の評価について調査研究する。

本小委員会では、産官学間の垣根を取り払った委員相互での率直な議論の成果として、上記に掲げた課題が解決されることを期待するものである。